

もう二十年にもなろうか。よくもまあ、続いたものだ。年に一度の我が家のオートキャンプのシーズンが、今年もまたやってきた。「今年のキャンプは、どこにする？」

二十七歳になる息子のさとしが、6月のとある日曜日の夕食時に、さりげなく、私に尋ねてきた。社会人になり五年たち、今年の春には、紆余曲折はあったものの、三年越しの付き合いの末、三歳年下の由美ちゃんと、めでたくゴールインしたのだから、もうそろそろ、親離れして、若い仲間同士で楽しんでくればいいのにと思うのだが、なかなか、そうはさせてはくれない。

オヤジとのキャンプのどこがそんなに楽しいのか、よくわからなのまま、毎年、かわるがわる、息子の友達を連れては、富士五湖や伊豆のあちこちのキャンプ場を渡り歩いている。でも、今年、十五歳になる父親にしてみると、毎年欠かさず、こうやって声をかけてくれる息子の一言が、実のところ、とてもうれしい。今年はとりわけ、新しい家族の一員に加わった息子の嫁の由美ちゃんに、我が家のキャンプの醍醐味を味わってもらおうのも楽しみなのだ。

「これまで、西湖、本栖湖、田貫湖、西天城高原、修善寺、湯ヶ島と色々なキャンプ場へは、何度も行ったけど、西伊豆方面では、まだ、キャンプしてないよね」

父親のさりげない提案に、息子のさとしが、早速、食後のテーブルにノートパソコンを持ち込んで、ネットで、キャンプ場の検索を始めた。『オートキャンプ 西伊豆』のキーワードで、インターネット検索してみると、松崎や仁科あたりのキャンプサイトが何箇所かヒットしてきた。

「うあー、このキャンプ場は、隣がすぐに海だから、テントの横から釣りができるかも」

最近、釣りを始めた由美ちゃんが、興味深そうにパソコンの画面を覗き込んで、会話に加わってくる。

「でも、港の近くで、雰囲気がいまいちのような気がするし、今年の夏は暑そうだから、夜寝る時、寝苦しいんじゃないかなあー」

キャンプといえば、高原か湖畔でやるものと決め込んでいる私が、さりげなく牽制球を投げる。

「それも、そうですね。キャンプ場は涼しい高原にしておいて、釣りや海水浴は、海に出かければいいんですものね」

由美ちゃんの初キャンプが、素敵な思い出になりますようにと私は、ひそかにお祈りするのであります。

1 持つ身であることから、キャンプに参加するメンバーは、それぞれ仕事を

の確認からキャンプの日取りを決め、キャンプサイトの決定と予約については、息子のさとしに一任することになった。参加予定者は、私の自家用車『プリウス』の搭乗定員から、私、父―はじめ、息子―さとし、その嫁―由美、そして息子の友人最大二人までとなった。友人二人が誰になるのかは、例年、スケジュール調整が難航するようで、直前にならないと決まらないことが多い。私としては、何年かぶりに、すっかり成長した息子の友達に久しぶりに会えるのも、このキャンプの楽しみの一つだ。

当日までに、私に課せられた課題は、今年になって乗り換えたコンパクトカーに、いかに5人分のキャンピンググッズを搭載可能とするかであった。外見からは、見るからにアウトドアグッズには似合わないこのクルマに、いかにしてアウトドアグッズを満載可能とするかを解決するために、カー用品ショップの店員と何度か相談して、特別注文して、ルーフキャリアと荷物搭載用のラックを調達し、ようやくキャンプ当日を迎えることになった。

7月最後のその日の朝は、雲ひとつない快晴のキャンプ日和となった。今日も猛暑日になりそうな、むせ返る外気の気配が、窓を開けると、むんむんと渦巻いていた。八時の集合時刻には、我が家の前泊して、前夜祭ではめをはずした息子の同級生の雄二君と恵太君も少々二日酔い気味ながら、起き出してきた。

「おはよう。雄二君も恵太君も、さとしの結婚式の時には色々世話になったな。今年もよろしくね」

「とんでもないですよ。今年はなんとか休みが取れて良かったです。三年ぶりのキャンプですね、とても楽しみにしてましたよ」

恵太君は、野球とサッカーで鍛えた色黒の長身で、ラフな短パンTシャツ姿で、あいさつしてきた。大学を卒業して、埼玉県にある販売店向けの什器備品メーカーで、製品の設計を担当しているらしい。我が家のキャンプの常連メンバーだ。

色白で小太りの雄二君が、のそりのそりと、少し後から気弱そうに登場した。

「おはようございます。久しぶりですが、よろしくお願ひします」

「さとしの結婚式の銅鑼コンビが、偶然、いっしょだね」

四月に行われた息子の結婚式では、私の父のアイデアで、披露宴の最初に、新郎新婦の門出を祝って、我が家伝来の銅鑼を参加者全員に、一人二回ずつ打ち鳴らしてもらったのだが、その銅鑼をテーブル間を持ち回る役を頼んだのが、雄二君と恵太君だったというわけだ。雄二君は、中学時代は、バスケの選手として活躍していたよ

うだが、その後は、映画青年となり、大学卒業後は、カメラマンの助手の仕事をしていると聞いている。

2  
最後にひげもそらずに、最も二日酔いの激しそうな、息子のさと

しとそれを心配そうに見守る由美ちゃんが起き出して、メンバーが全員集合となった。

「さとし、大丈夫か。キャンプ行けるか？」

「大丈夫、大丈夫」

そう言う割には、見るからに、全然大丈夫そうでないさとしが、うつろな目で返事をする。

「さとしくん飲みすぎちゃったようで、すいません」

「由美ちゃんが謝ることは無いよ、アルコール弱いくせに、いつも限度をわきまえないのは、さとしの方なんだから」

あらゆるイベントには、「前夜祭」と「後夜祭」がつきものであるというのが、さとしのポリシード。自分の結婚式の前日に、友達と飲みすぎて二日酔いになってしまい、披露宴のテーブルの下には、いざという時の為のバケツを用意していたという逸話まであるくらいだ。

「さあ、暑くなる前に、みんなで、クルマへ荷物の積み込みに取り掛かるぞ！ 一汗かいて、その二日酔いを吹き飛ばすことだな！」

私の号令で、事前にプリウスのルーフにセットしてあったキャリアアボックスに、テントやテーブル・イス等の大物道具の積み込み作業にみんなを取り掛かった。実のところ、テント<sup>3</sup>張り・テーブル・イス・コンロ・シュラフ等の大所帯道具が、果たしてコンパクトカートの小さなハッチバックのトランクルームとルーフキャリアに載せきれぬのか、いささか不安ではあった。しかし、統括担当である私としては動じるわけにはいかない。ここところは、多少ハツタリをかましても、適確な指示を飛ばすしかないだろう。

「テント・テーブル・イス等の大物はすべてルーフキャリアに乗せて、出来るだけ高く積み上げよう。最後に、ネットでカバーするから大丈夫。小物はトランクにぎっしり詰め込んで、クーラーボックスの中の空間も無駄にしないこと。それと、個人の持ち物は、後部座席の足下に置いてね」

一週間の仕事疲れを引きずった五十五歳の父親は、指示役に徹し、二十七才の息子とその友人たちは、二日酔いに耐え、素直に手際よくキャリアへの積み込みに精を出す。二十四才の嫁は、初めてのキャンプにハイテンションになり、こまごまとしたモノのトランク周りへの詰め込みに、手際よく能力を発揮していた。

やがて、三十分ほどで、すべての準備が整い、我が愛車プリウスは、屋根がガウデイの建築物のようにとがり、ハッチバックのトランクルームは荷物で満載で、運転席のバックミラーから後ろが何も見えないという、元のクルマの原型をとどめない、不恰なキャンピングカーに変身した。

3 出発前には、みんなでそろって、今月九十一歳を迎え、最近は何

「トに伏せ気味の私の父にあいさつをする。」  
 「くれぐれも気をつけろよ。由美ちゃんに負担をかけるなよ」  
 孫嫁をめぐらさう気に入っている私の父は、由美ちゃんと二日間も離れるのが、たいそう寂しいのだ。  
 「大丈夫よ。おみやげたくさん買ってくるからね」  
 家に残された父親とペットの猫の世話をにわか「いきものがかり」の私の弟に頼み、老若男女5人の思いと山盛りの荷物を満載して、見るかげも無く変形したプリウス「カタツムリ」号は、熱海の多賀から、よたよたと西伊豆のキャンプ場をめざして出かけることになった。

「運転していても、まったく後ろが見えないなあー。サイドミラーだけが頼りだよ」と私がぼやく。

「屋根から何かが落ちたらどうしよう」

「警察から不審車両として、職務質問されたらどうしよう」

「そもそも、『プリウス』でキャンプつて、似合わないと思わない？」  
 めいめい、好き勝手を言いながら、カタツムリ号は、山伏峠を越えて、修善寺を目指す。

「このDVDをかけてくれる」

息子のさとしから渡されたDVDは、タイトルを一目見て自分の結婚式のDVDとわかる。

「おいおい、朝っぱらから、その『お暑い』のだけは、お願いだから、よそうぜ！」

私が、呆れ顔で言うと、後部座席の友人二人と由美ちゃんも同調する。確かに来宮神社の挙式から熱海後樂園ホテルの披露宴までの二時間のビデオには、新郎新婦二人の愉快な仲間たちのスピーチあり、歌あり、物まねあり、バンド演奏、はたまたチアガールダンスまでありと、盛りだくさんの内容なのは確かだが、さとし流の「後夜祭」で、もう飽きるほど何度も観てるじゃないかと私は思う。

「いいから、いいから、お願い！」

しかたなく、カーナビにDVDを挿入すると、来宮神社の挙式のシーンが始まる。若い巫女さんが、くるくると人形のように回り、新郎新婦の三々九度の杯を交わすシーン、指輪交換のシーンへとビデオは続く。新婦のアップのシーンになると、

「あー、やだあー、止めて、もういいよ」と由美ちゃんが訴える。よっぱどはずかしいらしい。そのたびに、

「いいから、いいから、続けて」とさとしが遮る。

4 恵太君が銅鑼を持って、テーブルを回りながら、出席者一人ひとり  
 が銅鑼を鳴らすシーンが始まる。私は、息子にこんなにも多くの友

人たちがいたものかと、改めて認識するとともに、そういえば、どの顔も、我が家のキャンプの常連さんだったんだなと、改めてこの二十年のキャンプを一つ一つ、思い返しては、感慨にふけったりしていた。

三十分の銅鑼打ちタイムと主賓のスピーチ、乾杯が終わり、やがて、披露宴は、くだけた余興タイムに移る。スピーチ・歌・コント・物まね等、すべての新郎友人演者は、それぞれのテーマ曲に乗って、わざわざ入り口のドアから登場する大げさな演出や出演順のひそかな番狂わせ等の構成は、さとしが司会者と何度も打ち合わせをして、練り上げたものだった。

DVDを観ながら、呆れ顔の後部座席の三人も、途中からは、思わず大爆笑の渦に巻かれていた。

「最後の高志たち四人のバンドによる俺たち二人を送るオリジナルソングは、何度聴いてもいいね。ツイングитарをバックに高志のハーモニカとボーカルは、二十一世紀のボブデイルンといってもいい」  
若いくせに、ボブデイルン好きのさとしが、彼独特の口調で高志君のことを褒めちぎる。彼は、今日も、熱海伊東あたりで、乾物の営業マンとして、元気に飛び回っていることだろう。

「それに比べて、由美ちゃんのピアノ伴奏はすばらしかったのに、さとしのアンサーソングは、音程がかなり外れてたぞ」と私の鋭い突込みが入る。

そこをつかれると、さとしは何も答えられなくなる。このDVDのさとしのアキレス腱は、ここにあったのだ。

二十七歳の息子たちの世代。親からは見えないところでは、みんなそれなりの悩みを抱えているのかも知れないが、これだけ仲の良い仲間に囲まれていれば、助け合いながらこれからの人生、きっと何とかなるだろう。

私の二十七歳は、どうだったろうか。そうだった。私が結婚したのも、息子と同じ二十七歳。妻がすぐに妊娠して、二十八歳でさとしを出産。あれから、二十七年が経過したということか。早いものだ。

やがて、カタツムリ号は、裏道を抜けて修善寺の街中に差し掛かった。屋根の荷物は、何とかネットの内側に踏みとどまっているらしい。

「そろそろ、DVDは、このくらいにして、音楽にしません？」  
恵太君が提案した。

「そうだね、さとし、今日は、どんなCD持ってきた？」

旅行となると、紙袋にどっさりCDを詰め込んでくるさとしに私が尋ねると

「今日は、このDVD一枚だけしか持って来なかった」と答える。さとしにしてみると非常に珍しい。いざとなると、カーナビのハードディスクには、私のお気に入りJPOPや洋楽の数々が、ぎつしり入っているのだが、まずは、みんなに私が聞いてみる。

「誰か、何か、音楽持って来てないの？」

「僕、iPodなら持ってますけど！」と雄二君が答える。

「いいねえ。みんなで、聴けるようにできるかな？」

「シガライターソケットがあれば、FMトランスミッターでラジオに飛ばせますよ」と雄二君。

「よし、これからは、このカタツムリ号は、動くミニFM局だ！」

「なんだか、楽しそう！」と由美ちゃんがはしゃぐ。コンソールボックスを開けて、奥にあるシガライターソケットに、FMトランスミッターとiPodをつないで、ラジオを指定された周波数にあわせると、最新のJPOPのヒットソングが流れてきた。若い四人は、iPodで順番に好きな曲を選んで、楽しそうに口ずさんで、くつろいだ時間を送っている。

今回目指すキャンプ場は、西伊豆松崎の先の仁科川の上流にある銀河オートキャンプ場だ。熱海多賀の自宅からだ、伊豆半島の対角線上の最も遠隔の地に位置する。しかも、夏の海水浴シーズンの最盛期でもあり、出来るだけ海岸線の渋滞は避けて、目的地を目指したいところだ。

伊豆半島のほとんどの裏道が頭に入っている私は、修善寺から国道百三十六号線と並行する狩野川の対岸の道を湯ヶ島まで上り、そこから持越川を遡上するルートを選ぶことにした。

湯ヶ島といえば、小学校五年六年の担任だった恩師の杉本博先生の生まれ故郷にあたる。今年、八月に高校・中学・小学校と同窓会が三週連続で開催予定なのだが、中でも、四十四年ぶりに小学校のクラスと同窓生有志六名で、今年七十四歳になられる杉本博先生を訪ねる会に参加できるのを何よりも楽しみにしている。小学生の頃、当時の先生から、戦後間もない子供時代の湯ヶ島での川遊びの話とかを何度も聞いたことが、とても懐かしく思い出される。

「おもちゃも無い時代だったから、自分たちで、遊びを工夫して、結構楽しい子供時代を過ごしたものだよ。材木のかげらで、小船をみんなで作って、川の上流から流して、誰の船が一番早く着くか、競争なんかしたりしてね。案外おもしろかったよ」

6  
四十四年という歳月を超えて、博先生の声が、持越川のせせらぎと共に記憶の彼方からよみがえってくる。すれ違う車もまったく無く、せまい蛇のように曲がりくねった道をどこまで上りつめても、永遠にどこにもたどり着けないような、不思議な錯覚にとらわれる。このまま、五人が、博先生の少年時代の戦後間もない時代にタイム

スリッパ出来たら、博少年から色々な当時の遊びを教わることが出来て、とても楽しそうだ。

私の夢想を遮るように、突然視界が開け、どうやらこの道は、持越川の源流から西天城高原道路に接続したようだ。

「うわぁー、気持ちいいね！」と由美ちゃん。

「窓全開にして、高原の風を入れよう！」と、さとしが窓を開けて、涼しい高原の外気を車内に入れる。

「運がよければ、鹿と出会えるかもしれないね」

何年前前の西天城高原のキャンプで、鹿と出会えた恵太君が期待を込めて言った。

「山の上に鹿が群れてるかもしれないね。シカとしてるやつもいるから気をつけて探してごらん」

私がさりげなく言うと、由美ちゃんが、ぷぷつと吹き出した。

「オヤジギャグに付き合うんじゃないやねえ！」とさとしが、呆れ顔で言った。

「この道は、天皇陛下が、何年前前に、西天城高原で、植樹された時に作られた道なんだよ。その際、陛下が、西伊豆スカイラインから延長されたこの道を利用されたそうだが、もし、その当時、この道が無かったら、自分たちが、今来た持越川沿いの蛇の道を通るしかなかったそうだよ」と、私が、品格を取り戻そうと、うんちくを披露する。

「天皇陛下のおかげで、こんな気持ちのよい道が出来てよかったのか、その後あんまり利用されないとしたなら、無駄だったのか、意見が分かれるところですね」

雄二君が、問題提起を投げかける。

「まあ、今の時代環境では、作られることの無かった道なのかも知れないが、現にせっかくあるのだから、少しでも多くの人に、この高原の気持ち良さがわかってもらえればいいんだがね」

そろそろ「西天城高原牧場の家」に到着だ。このキャンプ場は、町営で料金が格安な上、コテージには布団までついているので、雨の心配も無く、夜の熟睡も保障されていて、私としては、割と気に入っているキャンプサイトだ。何度か、コテージ「うぐいす」には、やっかいになった思い出がある。

「牧場の家で、トイレ休憩して、おいしいソフトクリームをいただくことにしよう」

という私の提案に

「わぁー、楽しみ！」と甘いものに目の無い由美ちゃんが、ひときわ大きな声ではしゃぐ。

7 店 店は閉店。しかも宇久須に下る道が数日前の大雨のため途中に土砂

崩れがあったようで、通行止めとなっていた。

「これじゃ、ソフトクリームはおろか、トイレも使わせてもらえないな。宇久須に下って、海水浴か釣りでもしながら食材調達してから、キャンプインを考えていたけど、仕方ない、方針変更だ。これから、さらに険しい蛇の道を仁科まで突き進んで、午前中に、キャンプ場にまずはチェックインだ！」

「ええー」と若いみんなからため息が漏れる。前夜祭の寝不足と二日酔いから来る車酔いで、さとしは、かなりグロッキー気味なのだ。由美ちゃんもトイレが心配そうな雰囲気だが、気丈にも

「あと、一時間ぐらいなら何とか大丈夫です」と言ってくれた。男は、トイレは何とでもなるが、若い女性の場合は、そうはいかない。「それじゃ、早々、出発だ！」

我々は、伊豆半島の中でも最も険しいといわれている「西伊豆高原牧場の家」から仁科までの曲がりくねった獣道を前へ前へと進む。この日は、予想外に、県外車を含めて対向車が多くて、運転に気を使った。そうか、宇久須からのルートが閉鎖されているので、こちらの道にクルマが迂回しているの、交通量が多いのだ。

途中で、ついにさとしがギブアップ。  
「ちよつと、クルマ、止めて、頂戴！」

クルマ一台やつとの道で、停車できる場所を見つけると、ひとしきり手間取り、ようやく、待避場の路肩にクルマを乗り上げると、さとしが、クルマから飛び降りて、しゃがみこみ、嗚咽を始めた。二日酔いと乗り物酔いのシナジー効果。さとしは、子供の頃から、あらゆる乗り物に酔ってしまう。自動車・船・飛行機はおろか、新幹線でも酔ってしまうのだ。新婚旅行では、行きの新幹線で酔って、ハワイ行きの飛行機で酔って、現地で生魚のノロウイルスに当たって、散々なハネムーンを経験したという、類まれなエピソードの持ち主なのである。実は、私も、乗り物酔いが激しく、子供の頃の家族旅行では、三人兄弟が、軽自動車の後部座席に押し込まれて、ビールシートを匂いをかぐと、私だけ、たちまち車酔いしていた記憶が、よみがえってくる。クルマから降りた由美ちゃんは、心配そうにさとしの背中をさするが、どうやら、胃の中に吐くものは残っていないらしく、出てくるのは、胃液ばかりのようだ。

このアイドルタイムを利用して、比較的元気な残りの男三人は、そこいらに分散して、用を足すことにした。そういえば、この先の民家のあたりでは、昔、子狸が道を横断して、危うく轢きそうになったことがあったな。「猫じゃらし」というアートワーク風の喫茶店があったが、あそこのファミリーは、今頃どうしているのかなと懐かしく思い出したりもした。こんな田舎でも、辺りの風景は、少しずつ、少しずつ、知らぬ間に変わっているのだろうか。

クルマに戻ってみると、さとしの顔色も多少回復したようなので、私から提案してみるとした。

「さとし、クルマ運転してみるか？　自分で運転した方が、酔わないかも知れないよ」

「わかった。オヤジのプリウス初運転させてもらうよ」

エンジンスタートキーが無かったり、シフトレバーが普通のクルマと違うので、最初は戸惑いもあったが、すぐにカタツムリ号の運転にも慣れ、それと同時に車酔いからも回復したようであった。途中で、地下千メートルからの深層水を汲むことの出来るドライブインで、由美ちゃんも無事トイレ休憩を済ませ、午前中には、目的地のキャンプ場にチェックインを済ませることが出来た。

キャンプサイトは、前日の宿泊客のチェックアウト直後というところもあり、場所取りは自由に決めることが出来たので、トイレとシヤワールームや炊事場に近いサイトを二区画借りることにした。今回は、贅沢に、テント二張り、ダイニング用にメッシュテントを設営する計画だからだ。設営は、夕方に回すこととして、みんなで、テントやテーブル・椅子等のルーフの大型キャンプ道具をクルマから下ろして、場所取りの目印にした。

「身軽になったクルマで、まずは、腹ごしらえをして、その後は、釣りや素潜りにでもチャレンジしようか」と私が提案した。

「パパ、このあたりで、どつかおもしろいところ、知ってます？」

「このあたりだと、松崎に出るか、堂ヶ島に向かうかな。待てよ、仁科の国道沿いに『ぱびよん』とかいう喫茶店があったかな。そこ

のランチが、そこそこ、おいしかったような！」

と私が答える。みんなのお腹がグー言っているのです、そこで決まりということになった。お昼前の『ぱびよん』の店内は、比較的空いていて、みんなで、自分の好きな弁当ランチをいただくことにした。

さとしが、昔のキャンプで、松崎めぐりをした時の思い出を話した。

「あれは、二〇〇三年だから、七年前のキャンプの時だったかな。西天城牧場の家のバンガロー『うぐいす』で泊まって、翌日に、松崎めぐりをしたんだよ、たしか」と、話す。

「松崎の岩科学校に行ったら、お父さんが小学校時代に使っていたのと同じ国語の教科書が、展示してあったりして、とてもなつかしかったな」と私が思い出す。

9

「長八美術館では、虫眼鏡を借りて、見事にこてで形作られた作品を食い入るように入ったな。そして美術館の向かいの『さくら』ってという地魚料理の店で、料理の前にとろてんを食べ過ぎて、肝

心の料理が食べられなくなったりしてね」と、さとしが笑い出す。  
由美ちゃんが

「さとしくんは、その頃から、今と変わらず、食いしん坊だったのね」と茶々を入れる。

「なまこ壁の橋や時計塔、それから商家の見学もしたね」と私が懐かしく思い出す。あれから、もう七年か。

「松崎といえは、たしか、その川のあたりで、テレビドラマの『セカチュウ』のロケがあったんですよ。それから、映画の『バーバ―吉野』のロケ地としても有名ですよ」

映画関係の仕事をしている雄二君が言う。

「『セカチュウ』、懐かしいですね。ところで、『バーバ―吉野』って何ですか？」

と由美ちゃんが尋ねる。

「たしか、村に、床屋が一軒しかなく、その床屋で子供たちが、みんな頭を刈られちゃうもんだから、村中の子供のヘアスタイルが同じになっちゃまう、そんな映画だったよな。その床屋の名前が、バーバ―吉野で、『吉野刈り』っていう名前のそのヘアスタイルは、ビートルズのマッシュルームカットみたいなやつだったよな……」と恵太君が答える。

「恵太、よく知ってるね」と雄二君が感心する。

「映画のロケ地に選ばれて、それだけ、名所は多いし、食い物はうまいし、風光明媚で、いいところってことさ。またいつか、松崎には、ゆっくり来たいものだね」と私が言う。

「そんなことを話しているうちに、みんな、それぞれのランチを満足げに平らげていた。」

「食事を済ますと、はやる心を抑えて、堂ヶ島手前の仁科漁港へ向かい、夕方までの時間、私たちは、二手に分かれて、釣りや岩場での素潜りを楽しむことになった。」

息子たち二十七歳の三人組みは、水中メガネとシュノーケルを持って岩場の方に消えていった。残された私と由美ちゃんは、堤防から釣り糸を垂れることにした。

「アジでも釣れると、晩のおかずの足しになるんだがなあ」と何か釣れるとイイですね」

二人で、コマセのアミエビで魚を寄せて、オキアミのえさ釣りで海底近くの魚を狙った。潮の動きも悪く、昼間の難しい時間帯でもあり、魚の食いが立っておらず、他の釣り人もまんじりもしない時を過ごしていた。

10 必死に釣り上げると、外道のオコゼのような魚が釣れてきた。そのうちに、由美ちゃんの竿にアタリがあり、大きく合わせて、

「やったね、由美ちゃん。初釣果。すごいじゃん」  
「わーい！ やつと釣れました。これ、食べられますか？」  
「うーん……あとでみんなに見せようじゃないか。バケツに水入れてキープしようよ」

一目見て、煮ても焼いても食べられない魚ではないことはわかったのだが、初心者初釣果は、思い切り、持ち上げなくてはいけない。次の大物釣りへの大いなるインセンティブとなるはずだ。

そうこうしているうちに、海面を大きなボラの群れがよぎったので、私は、仕掛けを水面近くまで、引き上げてみると、うまいことに一匹が掛かって、勢い良く竿をぐいぐいと沖に引いていった。これは、三号のハリスでは、もたないかもしれないと思っただが、タモも持ち合わせていなかったもので、思い切ってごぼう抜きしたら、うまいこと堤防に銀鱗の四十センチのボラを引き上げることが出来た。

「パパ、すごいね。大物ゲット！」  
由美ちゃんが、小躍りして、大喜びした。

「いくら大きくても、ボラはボラだからね！」

一応、キープしておいて、息子たちに見せた後で、リリースすることにしようと、私は思った。

それから、さらに三十分ぐらい粘るが、二人とも魚から見放されて、雑魚一匹として釣れなかった。

「しばらくすると、若人三人組が戻ってきた。

「収穫はどうだった？」と私が尋ねる。

「全然、なんにもいないね。サザエ、アワビ、トコブシはおろか、『しまったか』ですらない。いるのは、紫ウニだけだね」

「そうか、なかなか帰ってこないから、海底に沈んじゃったのか、それとも密漁で逮捕されたのかと心配したぞ」

と、私は笑いながら言った。

「こっちは、ごらんの大漁さ。大ボラとオコゼのペア」

「すごい豊漁ですね、今夜のおかずは、カラスミとオコゼのてんぷらですか？」

恵太君が、白い歯を光らせて笑う。

「まあ、お陀仏君になる前に、リリースすることにしようか」と私が言い、雄二君が、恐る恐る、バケツの魚を海に戻すと、大小の二匹の魚は、我々に感謝の言葉も無く、よたよたと海中に戻って行った。

それから、選手交代とばかりに、私が、さとしから水中メガネとシュノーケルを借りて、岩場の素潜りにチャレンジしてみることにした。

11  
七月末の海水は、予想以上にぬるく、比較的、波も静かな岩場から背泳ぎで沖に出てみる。このなんともいえない浮遊感、遠くから

聞こえるセミの声、じりじりと容赦なく照りつける真夏の日差し、どれ一つとつても、四十年前の夏と何一つ変わっていない。あの頃の夏といえば、毎日、こんな風に、熱海の磯の波間に揺られながら、サザエや『しまったか』を採り、家に持ち帰っては、今は亡き母に塩ゆでにしてもらって、おやつ代わりに食べたものだった。今は九十一歳の父は、それをつまみにして、ビールをうまそうに飲むのを見るのが好きだった。今、もう一度、十五歳の少年に戻って、深く、深く、この海の底に潜ってみよ。「はじめ、おまえなら、できるはずだ」。誰かが、どこかで、そうささやいている声が、聞こえたような気がした。

遠くから、堂ヶ島の遊覧船が旋回して、こちらに接近してくるのが見えた。スクリューの音が、カラカラと耳の奥に響いてくる。遊覧船の乗客が、こちらに向かつて手を振っている。私も、立ち泳ぎになつて、手を振り返して応えた。私は、今、こんなにも一人ぼっちだ。太平洋の片隅で、しみり泣きたいぐらい、一人ぼっちだ。奇妙なセンチメンタリズムを跳ね除けるべく、私は、十五歳になりきつて、息を大きく吸い込み、垂直に頭を沈め、足を天に伸ばして、勢いをつけた。ところが、十五歳の少年は、三メートルも潜ると十五歳の中年に戻り、腹回りの脂肪の浮力からくる「アルキメデスの原理」には逆らえず、海中でいくらかもがいても、海底の岩場の海草まで、もう少しのところまで手が届かず、それをつかむことはできず、岩穴の中に、どんな貝が潜んでいるのかも伺い知ることができないのであった。

三十分ほどのチャレンジの末、よたよたと岩場が上がった時には、足元がふらつき、滑って左の膝は擦りむくし、スイカ柄のゴムぞうりの鼻緒のゴムは伸び切ってしまうし、見るに無残な醜態をさらす羽目となつてしまった。

膝を擦りむくなんて、何年ぶりのことだろう。そう、あれは、十四歳の夏の出来事であった。夏休みの学校の校庭に、仲の良い友達と自転車の無茶な二人乗りで乱入して、転んで擦りむいて以来の出来事であった。あの時、偶然出会ったマイクロバスの移動図書館は、今でも変わらず、市内を巡回しているのだろうか……

「パパ、膝から血が出ているけど、大丈夫？」

そつとしいてくれればいいのに、目ざとい由美ちゃんが、心配そうに声をかけて、ティッシュとバンドエイドを差し出してくれる。「大丈夫、ちよつと、ぞうりが滑っただけさ。さとしの言うとおり、貝という貝は、何一つ見当たらない海だね。海の幸の現地調達は断念して、そろそろ、近くのスーパーで、食材の買い付けに行かなくちゃね」

12 四人の視線が、血の滴る私の左の膝小僧からそれるようにと、お

どけて笑いながら、話題を変えるのに私は懸命であった。

堂ヶ島の横にある海水浴場で、シャワーを浴びてさっぱりした五人は、近くのスーパーで、キャンプの食材の買い付けをすることにした。

「今年のテーマは、大人のバーベキューでいこう。量より質で勝負だ！」

私が、食材の買い過ぎに釘を刺す。毎年、あれもこれもと、買うのはいいのだが、食べきれずに、残す食材が多いことが、反省材料として上がるが、翌年になると、また、きれいさっぱり、忘れ去られて、食材の買い過ぎが、毎年懲りずに繰り返されてしまうのだ。「まず、肉は、豚鳥はやめる。飛騨牛のサーロインと黒毛和牛のカルビに絞ろう。後は、タンを少しだけ」

と私がポイントを言うのだが、「少しだけ、手羽先ほしいね」と恵太君。

「朝のパンにウインナーはさみたい」と雄二君。

「イカ焼きもやったらおいしいかも」とさとし。

「だんだん脇役が増えていく。」

「野菜は、大切。にんじん、ナス、ピーマン、もやし、たまねぎ、とうもろこしもおいしそう」と由美ちゃん。

「米は無洗米の二キロあるかな、焼きそばは、買いすぎないこと、朝はカップヌードルが意外とおいしい、でもパンもほしいね」

「カップコーヒを忘れないこと、飲み物は、プレミアムビールの飲み比べにしよう。ワインも一本キープしようか」

「わいわいがやがやの買い物ツアーは、結局、買い物カゴ四つ分になつてしまったが、まあ、仕方ない。残ったら持ち帰ることにしよう。」

キャンプ場に帰ると、あたりには夕暮れが迫り、周りの区画では、すっかりテントは張られているし、おいしそうなバーベキューの匂いが漂ってくるサイトもチラホラ見受けられ、我々は、若干の焦りを感じないわけにはいかなかった。

「みんなで、役割分担を決めなくちゃね」

「今年は、宿泊テント二張りにダイニングキッチン用のハウス型のメッシュテントの設営に手間取りそうだから、男三名必要となるな。」

これには、さとしと恵太君に手伝ってもらうけどいいかな。由美ちゃんも雄二君は、食器洗いと野菜の下準備をお願いね」

「よっしゃー」

「いいですよー」

13 「了解しました！」

という具合で、それぞれの分担に沿って作業に取り掛かる。私たちは、まず、寝室用のドーム型テントとハウス型テントを組み立てて、ペグハンマーで、ロープを地面にペグで固定していく。地面が硬いとこれがなかなかの肉体労働を強いるのだが、私の半分の年齢の二人は、めげることなく、トンカチをたたき続けていた。ここまでは、順調に進んだのだが、大型のハウス型メッシュテントには、多少手こずってしまった。最近では、タープで済ませることが多く、大掛かりなメッシュテントの出番は、あまり無かったのだが、今回は、久しぶりに登場と相成ったわけだ。これのハウス型の屋根の支柱は、三人がチームワーク良く連携しないと、うまく立ち上がらないのだ。ペグがしっかりと地盤に食い込まないと、大きなテントが倒れてしまうので、注意しなくてはならない。悪戦苦闘一時間の末、なんとか、一夜限りの贅沢なLDK家屋が、すべて完成した。

メッシュテントのリビングダイニングキッチンにテーブル、イス、コーلمانのツバーナーコンロをセットアップして、ランタンの明かりをつけた頃、タイミングよく、由美ちゃんと雄二君が、洗った食器と下処理した食材を抱えて、戻って来た。

「それでは、そろそろ、ここに集った皆さんの再会を祝して乾杯しようか」

と私が言い、雄二君が、冷えた缶ビールをクーラーボックスから取り出して、みんなに手渡す。

「乾杯！」

「来てよかった！」

「キャンプのビールって、何でこんなにうまいんだろう！」

「生きてて良かった！」

「そりゃ、おおげさだろー」

みんなで、がやがややっているうちに、コーلمانのツバーナーコンロにチャッカマンで、点火する。この儀式は、今のところ、いまだに、私の仕事。二十年間働き続けたヘビーデューティなコンロに感謝。我が家のキャンプの歴史と共に生き続ける何物にも変えがたい財産だ。今年には、ついに、ポンピング用のゴムパッキンを交換した。次に交換するのは、さらに二十年先のことだから、それまでにしっかりと息子のさとしに交換方法を引き継いでおこなうてはならない。

「それでは、まず、飛驒牛のサーロインいきます」

「一番おいしいものを一番最初に食べるのが、私たちの流儀だ。」

「塩コショウだけで、いただいでみましょう。肉本来の味がわかるはずだから」

14 アルミの鉄板の上で、ジュワーと音が響き、芳ばしい香りとラン

タンの明かりに揺らめく霜降りの色。目と耳と鼻で、おいしさの予感にうっとりする。由美ちゃんが、焼き過ぎないように、手早く包丁を入れて、みんなのお皿に分けてくれる。

「うんめえー」

「最高！」

「口の中でとろけちゃう……」

「ジューシー」

五人に同時に、あんまり言葉にしたくない「至福の時」が訪れたようだ。

何年かして、この日の、この肉の味を、この五人の誰かが、ふと、思い出すことがあるだろうか。

私の十二歳のあの日のように。

当時、決して豊かではなかった、私の少年時代。牛肉はおろか、豚肉ですら、たらふく食べさせてもらえないわけではなかった。そんな、つつましい家族、兄弟三人連れて、父と母とで山中湖のバンガローにキャンプに行ったことがあった。コールマンのツバーナーも無い時代。固形燃料とアルミの積み重ね式のコッヘルを母親が買って、山中湖へと向かう途中の肉屋で、父親が言った。

「いいか、はじめ。今日は、お前が好きだけ、肉を食っても良いからな！」

牛肉でこそなかったが、食べきれないぐらいの豚テキをその日に食べさせてもらえたことは、今でも忘れない。

そうだ。その時のコッヘルは、今もこうして、刻んだ野菜のトレイやお湯を沸かすケトルとして、さりげなく使われているではないか。もう四十三年間も。どこの家にも、いくらなんでも「大きな古時計」は無いにしても、我が家の銅鑼やコッヘルやコールマンやこの三張りのテントのような、三世代・四世代継承されている貴重な品々のいくつかが、ひっそりと息づいていて、綿々と使われ続けているのかも知れない。

「このあとは、黒毛和牛のカルビになります。野菜もバランスよく食べてくださいね！」

由美ちゃんが手際よく、野菜とカルビを鉄板に広げて、めいめいで焼きながら、宴が盛り上がっていく。雄二君は、ビールからワインに転向したらしい。さとしは、イカ焼き職人の挑戦を始めた。恵太君は、さつきから「いいよなあー、いいよあー」の連発で、だいぶ酔いが回ったよう

で、  
「もう、埼玉には帰りたくない！」

とか、わけのわからないことを言い始めていた。それぞれの十七歳。一人の東京暮らし。暗いアパートの鍵を開ける瞬間のかび臭

い匂い。日曜日の夕方のサザエさん症候群。みんな、孤独と寂しさやましがられてはいるもの、やっぱり、人知れず悩みを抱えて生きていくつになっても、この私だって同様。

「それぞれ、みんな弱さをさらけ出して、そっと羽を癒す時間が、ほしいからなのかも知れない。」

「そろそろ、焼きそばにしましょうか？」

由美ちゃんが提案するが、みんなは、もう満腹気味なのが、目を見るだけでわかってしまう。昔のキャンプだと、ここから、鍋いっぱいのカレーが待ち受けていたりして、全員に割り当て配給なんてことになり、大変な事態に遭遇したものだ。今回は、五人で焼きそば三玉だから、このくらいなら、何とかなるだろう。ミックス野菜の袋と残りのカルビ肉とで手際よく、焼きそばを作って銘々皿に配分する。

「由美ちゃん、味付けなかなかうまいねー」

「適量であることが、焼きそばのポイントだね」

「肉が、牛カルビっていうのが、いいね」

「犬もおだてりや木に登る」

さとしだけが、わけのわからないことを言っていて、由美ちゃんに、にらまれていた。

さとしが、由美ちゃんの機嫌を直そうと、

「そろそろ、花火やろうか」と提案する。

「いいねえ、やろやろ！」と単純な由美ちゃんが、のってくる。

さとしが、台紙もののお子様花火とデジカメをクルマから取り出してきて、銘々に手渡しして、チャッカマンで、次々に火をつけた。四人が火のついた手持ち花火を持ってキャンプサイトの広場をぐるぐる回ると、さとしが、デジカメのシャッターを次々に押した。みんな、酔っ払って足元がふらついていられるのもかまわずに、ダンサーのようにタバコをくゆらせて、踊っている。とてもはかない一夜限りの「真夏の夜の夢」。

隣のキャンパーの家族も、こちらの花火を楽しそうに見ている。千葉ナンバーのワンボックス。三十代と思しき若い夫婦と、小さな女の子の二人姉妹。プードルの子犬も同伴のようだ。その子犬が、折りたたみイスの上におしっこをしたように、母親が、鼻を押し付けて、お尻をかくくたいたいてしかっている。姉が、お母さんに尋ねているのが、かすかに聞こえてくる。

「どうして、隣のおうちのお姉ちゃんは、子供なのにタバコ吸っているの？」

きつと由美ちゃんのことを言っているのだろう。何もかも忘れて、小学生の童心に帰り、ほろ酔い気分では花火をする我々は、あどけない子供の眼からは、少し大きな子供のように映っているのだろうか。なんだかとても、ほのぼののして、思わず、クスツと笑ってしまう。虫かごには、みやまくわがたが、何匹も入っている。きつと、父親の捕まえたみやまくわがた。今日のこのひと時を偶然共有する、二つの家族。明日は、別々の道を歩んで行き、二度とどこかで出会うことは無いだろうな。そう思うと、なぜかとても切ない。花火を終えると、深まりゆく夜の中で、お湯を沸かして、コーヒを味わいながら、トランプゲームを楽しむ。大貧民に七並べ。五十五歳のオヤジは、半分の年齢の若造になかなか勝てずに、イライラが募るばかり。でも、楽しい夜であることは、間違いない。

十時過ぎると、ダイニングでのおしゃべりも近所迷惑となるので、当キャンプ場の目玉である銀河広場に探索に出かけることにする。キャンプサイトの道を登ったところにはキャンプサイトとして未区画の広場があるらしい。そこが、「銀河広場」と呼ばれている空間だ。人工照明がまったく無い場所なので、空が晴れた夜には、星空が、まるで手に取るようにクッキリと見えるらしい。だから、このキャンプ場は、オートキャンプ場「銀河」と呼ばれているわけだ。

八年前のキャンプ。場所は、湯ヶ島の「かたつむり」だったかな。ログトレーラーハウスでのキャンプだった。あのときには、恵太君が一緒だったような気がする。夜になると満天の星空で、丸太を半分にしたベンチに、一人ずつ寝そべって、誰が流星を見つけたか、競争したものだった。思いのほかたくさん流星が、鮮やかに見えて、みんなで感動して、なかなかやめられなかった。息子たちの十代最後の夏だった。大学、専門学校とみんなばらばらの進路で親元を離れて、久しぶりに集まって語り合った夏のひと時。さとしと恵太君は、あの星空の美しさを今でも覚えているのだろうか。

口には出さないが、忘れるわけではないのだろう。二人は、わたしに追いつけないほどの力強い足取りで、ぐんぐんと銀河広場を目指して登っていく。なんとか、私は、その後をついていく。でも、由美ちゃんと雄二君は、乗り気ではなく、おのずと遅れ気味に二つの集団に分かれていく。

ランタンと懐中電灯がそれぞれの集団にあるので、お互いの距離感にはわかるのだが、その差が開く一方だ。

「おーい、早く来いよー」と私が後方の二人に声をかける。  
「こっち、こっち」とさとしも促す。

17 先行組みの三人が懐中電灯で合図を送るが、ランタン組みは、立

ち止まったまま、  
「こわいよー」と由美ちゃんが、心細い返事を返す。

「疲れたー、もうだめー」と雄二君も追隨する。

「しようがないなー」

と懐中電灯組みは、逆戻りして、由美ちゃんと雄二君の様子を伺う。

「怖いよー。それに雄二君、こんなに汗かいて、もう歩けないって言ってるしー」

懐中電灯で、雄二君の顔を照らすと、確かに青白い顔をして、額から首筋まで、びっしり汗をかいて、うずくまっている。

「おまえ、ワインの飲みすぎじゃないのか？」

恵太君が尋ねるが、辛そうで、答えが、返ってこない。

「しょうがないなー、それじゃー三人だけで行ってくるから、ここで待ってて」

さとしが、あきらめて、二人に言い含めた。

「さとし君、行かないでー」

しまいには、由美ちゃんが、泣き出す始末。

「心配いらない、すぐ帰ってくるから。二人して、ここでじっとしていれば、大丈夫だから！」

私は、不安そうな二人に言い含めて、さとしと恵太君の後を追った。少し歩くと、右手に造成された芝生の広場が広がった。懐中電灯でサーチライトすると、深夜の湖水のように草原が広がっていた。

「ここが銀河広場じゃないのかな？」

さとしが、言った。

「そんな感じだな」

恵太君がうなずいた。

三人は、はやる気持ちを抑えて、芝生の広場に入り、適度な距離にトライアングルとなり、仰向けに寝そべって体制を整えた。それぞれの脳裏には、言葉には出さないが、八年前の「かたつむり」のキャンプの記憶がよみがえる。あれから八年。十九歳だった君たちの夢や希望のいくらかは、あの日の流れ星へ込められた祈りの通り、かなえられただろうか。それとも、社会人として過ごした五年間の荒波の中で、とつくについでしまったのだろうか。それを確かめる時間がやってきたのだ。

「いいかい、それじゃー、ライトを消すよ！」

さとしが海中電灯のスイッチを切ると、あたりは、漆黒の暗闇に覆われる。目が慣れるまで天を仰いで、待ってみるが、息も出来ないくらいの一閃の光から隔絶された真つ暗闇が、三人それぞれの上空百八十度に、ただ、ただ、広がっていた。

18 「昼間は、あんなに天気が良かったのに、曇りかよー」

「がっかりしたように、さとしが言った。  
「今回のキャンプのメインイベントだったのに、がっかり！」

「まあ、こんな日もあるさ。次回のキャンプでは、きつとすごい流星群の嵐にお目にかかれるかもしれないよ」

「あんまりなぐさめにもならない言葉を私は、二人に告げて、起き上がり、背中についた芝をお互い払った。八年前の答えは、来年にお預けということか。あるいは、そんなに簡単に神様は、我々に答えを出してはくれないということなのだろうか。まあ、「我々、人類の前途には、暗雲が立ち込めている」なんてことにだけには、なつてほしくないのだけれど：

三人は、銀河広場を後にして、もと来た道を戻り、由美ちゃんと雄二君が待つ場所まで下ると、

「遅い、遅い、すぐ帰って来ると言っただのに……待ちくたびれて、蚊に喰われて大変だった」

由美ちゃんが、愚痴って、ぶつぶつさとしを責めていた。

「銀河広場は、見つかったの？ 空一面の星の洪水と流星の嵐は見えたの？」

すつかり元気を取り戻した雄二君が、畳み掛けるように、尋ねて来た。

「それが、あいにくの曇り空で、残念ながら、星一つ、見えなかった」

私が、答えると

「それは残念でした。じゃ、早くテントに帰って、デザート食べましょ」と由美ちゃんが、みんなを促す。

「キャンプ場に戻ると、メッシュテントの壁面に、薄い緑色の物体がへばり付いていたのが、目についた。懐中電灯でさとしが照らすと、羽化したばかりのセミだった。近くには、セミの抜け殻が貼り付いている。偶然とはいえ、皆で、興味深深、観察することにする。」「地中で、七年間幼虫として生活していたセミが、クヌギの木がいつぱい乱立しているこのキャンプ場で、よりによって、ナイロンの一夜限りのメッシュテントで羽化するなんて、感慨深いよな」

私が、言うと

「七年前の地下生活者が、ナイロンの足場から、残された七日間の命を燃やして旅立って行く」とさとしがいう。

「なんか、凝縮されたドラマを感じるね」と雄二君。

「明日の朝まで、このまま、そっとしておいてやろうよ。きつと、日の出と共に、飛び立って行く事だろうよ」と恵太君がやさしいことを言う。

19 「七年間待ちわびた、真夏のゴールデンウィークって感じかな」と

由美ちゃんが、最後にきめる。

キャンプの夜は、誰をも詩人に変える。

プリン、ゼリー、シュークリームと、思い思いのリクエストに応じて調達したデザートを満腹にしたはずの別腹に格納して、寝室用のそれぞれのテントに潜り込むことにした。

私は、さとしと由美ちゃんのテントにするか、それとも雄二君と恵太君のテントにするか一瞬迷ったが、どちらでも良いと思った。みんなひっくるめて、愛しい息子・娘のようなものだから……

前日の夜更かし、深酒がたたって、翌朝の起床は、五人そろって、八時を回っていた。

私は、悪夢にうなされたようで、ぐっしよりと寝汗をかいて、目を覚ました。それは、踏み切りでいつまでも続く貨物電車の通過をひたすら待ち続けるような、徒労感だけが残るおかしな夢であった。あたりのテントサイトからは、朝食のおいしそうな匂いが漂ってきて、ようやく目が覚めた。私は、まっ先に、メッシュテントに行つて、昨夜羽化したセミが、無事飛翔しているか、チェックした。幼虫の抜け殻だけが残っているのを確認して一安心。今頃は、どこかの大きな木で、勢い良く鳴き声を轟かせていることだろう。

コールマンのツーパーナーでお湯を沸かす頃、若い四人が、それぞれのシュラフのサナギから起き出してきて、朝食の準備が始まる。キャンプの朝は、普段だともでもない食べ物が、こんなにおいしいものだったのかと痛感させられる瞬間である。

たとえば、カップヌードル。たとえば、炒めたシャウエッセンをサンドしただけのパン。たとえば、カップのインスタントコーヒー。カップヌードルは、カレーだったり、シーフードだったり、各々、好みの香りがテーブルから漂うが、それは、それでかまわない。私の父母の代から使い込まれたアルミのコツヘルのケトルと二十年来使い込まれたツーパーナーのコンロで大量のお湯を沸かす。昨夜は、あんなに大食いをしたはずなのに、腹を減らしたハイエナ共は、各々のヌードルに注ぐお湯は、まだかまだかと、鍋のお湯が沸騰するのを待ちわびている。七歳のチビツ子ギヤングだった息子とその友達たちは、二十年前も今と同様に、こんな風景で、足がまだ地面に届かぬイスでバタつかせながら、「お湯まだあー」とか催促したものだ。あの頃と比べて、変わったものは、何なのか？ 変わったものはないものは何なのか？

「カップヌードルがこんなにおいしいとは思ってもみななかった」  
由美ちゃんが、シーフードのカップヌードルをおいしそうにす

「雄二、食いすぎるなよ、さらに、太るぞ！」と恵太君。  
昨夜、雄二君は、さとしに裸のおなかの写真をストックされたの  
で、何もいえない。

コーヒーをすすりながら、のんびりしていると、隣のテントサイ  
トでは、早くも撤収が始まった。千葉ナンバーのワンボックのクル  
マに、畳まれたテントやイス・テーブルが、次々に積まれていく。  
母親が娘に尋ねる。

「あんたたち、このくわがたはどうするのよ？」  
「知らない」姉が即答する。

せつかく、父親が捕まえた「みやまくわがた」のオス五匹、持ち  
帰って千葉で飼われることもなく、やがて、くぬぎの木に放たれる  
のだろうか。くわがたにしてみると一安心ということだろう。プー  
ドルの子犬は、ここが気に入ったと見えて、帰りたくないらしく、  
そつと、さらに隣のサイトに逃げ出そうするが、母親に見つかって、  
車に押し込まれて、小さな逃亡計画は無事失敗に終わった。これか  
ら、どこかに、より道しつつ、長い長い、岐路の旅につくのだろう  
か。

「我々もそろそろ撤収しようか」

私の号令で、撤収が始まる。撤収は、手馴れたもの。設営との違  
いは、テント設備の撤収は、二人で十分ということ。その分、洗い  
物やごみの片付け等に三人をあてがう必要があること。今度は、テ  
ント撤収は、さとしと恵太君に任せて、私が、由美ちゃんと雄二君  
を手伝って、洗い物とごみの片付けをサポートする。炊事場の水は、  
冷たいが、気持ち引き締まって心地よい。こんなところにも、セ  
ミの羽化の抜け殻があったりしてびっくりした。セミの幼虫は、あ  
たりかまわず、羽化するということなのだろうか。

テントの撤収、洗い物、ごみの分別片付けが一通り終わると、ク  
ルマへの積み込みが、始まる。いったんは、身軽になったプリウス  
は、再び、不恰好なカタツムリ号へと変身していく。

「準備完了！ 由美ちゃん、ところで今日の予定は？」  
と私が尋ねると、すかさず、仕切り屋の由美ちゃんが、

「今日は、これから、稲取のアニマルキングダムに行きます。でも、  
その前に、テニスをやります」

「アニマルキングダムってのは、あまり聞かないが、稲取バイオパ  
ークのことかい？」と私が確認する。

「そうです。昔のバイオパークの装いが新たにあって、アニマルキ  
ングダムに生まれ変わったんです。ホワイトタイガーもいるんです  
よ」と応える。

21 彼女は、大の動物好きなので、旅行の行程には、必ず、動物園、  
水族館の類が絡むことが必至となる。また、私は、テニス好きなの

で、テニスがあるとうれしい。こうして、二人の希望で、大まかな行程は、大体決まってしまうのだ。

「そうすると、テニスは、稲取スポーツヴィラあたりが近くてちょうどいいね。一汗かいて、ビール飲んで、アニマルキングダムとやらに行くことにしよう！」

「いいねえ、いいねえ」

キャンプサイトの管理人にお礼をした後、カタツムリ号は、のろのろと砂利道に出た。

「ところで、ちよつと気になってたんだけど、昨夜の銀河広場の上がどうなってるか、クルマで行って見ないかい？」

私が、みんなに聞いてみる。

「いいよ」さとしがすぐに返事を返した。

私は、暗闇でよく見えなかった銀河広場がどういった場所なのか、見ておきたかったのと、その道を、さらに上っていくと、その先がどうなっているのか、気になっていたのであった。ハッチバックのトランクルームは荷物が満載で、バックミラーからはなにも後ろが見えず、屋根には、荷物がうず高く積まれたカタツムリ号は、五人の好奇心を乗せて、のろのろとキャンプサイトの道をさらに上に向かって登って行った。しばらくすると、右手に昨夜の銀河広場が見えてきた。

「なるほど、ここは、やはり将来のキャンプサイトにする予定で造成した土地の様だな。展望台と天体望遠鏡でも設置すれば、それらしくなるけど、今は、看板以外、何にもないね」

私は、期待はずれの情景にやや失望して、銀河広場を右手にやり過ぎし、ゆっくりとクルマをさらに上に進めた。石畳の道は、苔むす地割れした道に変貌し、道幅は、徐々に狭まって行った。左側は、山肌を切り開いたむき出しの岩肌がせまり、右側は、ガードレールも無い崖っぷちの断崖に変貌して行き、対向車が来ることは無いとは思うが、クルマ一台通るのがやつの状態となっていた。みんなの不安な様子がバックミラーを見ていると伺えるが、自分だけは、心配をかけまいと、

「この道、結構スリリングだけど、どこまで続いているのかな？ 西天城高原道路につながっていたらすごいな！」

とか、言ってみたりした。このまま、この道が先細りになり、行き止まりとなった場合は、バックミラーで後ろが見えない状態で、サイドミラーだけを頼りに、後退で銀河広場まで戻らなくてはならないのだった。実のところ、ハンドルを握る私の手は、汗でびっしよりになつていたのであった。五分ほど苔むす石畳の道を慎重な運転で進むと、運よく道幅の広がった待避場が出現した。ここを逃すとどうなるかわからない。私は、みんなにＵターンの同意を求める

ことにした。

「これ以上進んでも、何もありません。同意してくれませんか。」

私は、崖からクルマもろとも落ちないように、何度も切り返しを繰り返して、カタツムリ号を何とかUターンすることに成功した。その後、一目散で、坂道を下り、この小さな冒険から、無事生還できたことを神に感謝した。銀河広場まで戻り、広場を左手に見て、最後の見納めとばかりに、私は、そこでブレーキを踏んで、一旦停車した。「さらば、銀河広場。またいつか、ここで、今度こそ、あふれるばかりの満天の星空と流星を見たいものだ」と心の中でつぶやいたつもりであった。さとしと恵太君も、同じような感慨にふけっていたのかもしれない。

その時、ふと、広場の一番奥に、樹木ではない何物かがあることが、視界の片隅に見て取れた。それは、鹿のトルソー。大きな牡鹿のしやがんでいる彫像のように見えた。来るときには、気がつかなかったが、鹿の彫刻が、目立たないけれど、そこに設置されていたのだ。立派な角を持った見事な牡鹿が、こちらに向かって、しやがんでポーズしている。威風堂々とした写実的な作品だ。その時だった。彫像の角が少し左右に動いた。私は、その瞬間、鳥肌が立ったのを今でもリアルに覚えている。

「あそこに、ホンモノの鹿がいる！」

クルマのみんなにそう言うのがやっとであった。

みんな、クルマの窓から釘付けになってその鹿に注目した。

「ほんとだ」

「どれどれ」

「あそこよ」

「でかい！」

私は、引き寄せられるように、クルマをパーキングモードにして、震える手でデジカメラを持ち、そっとクルマのドアを開けた。ゆっくり、ゆっくり、一歩、一歩、引き寄せられるように、鹿に近づいて行く。残された四人は、誰もクルマから降りてこない。

由美ちゃんが後ろから、声をひそめて言う。

「パパ、気をつけて！」

圧倒的に大きな角。静かに、ひるむこともなく、こちらを直視する目。ゆっくり、彼は、立ち上がる。引き締まった四肢。茶色の胴体に広がる白い斑点。私は、祈るように、一歩一歩彼に近づく。どうか、まだ、去らないでくれ。もう少し、近くに行かせてくれ。もっと近くで、その瞳を見せてほしい。それは、奈良公園の餌付けされた鹿とはまったく違う、野生の無垢な生き物。人に対して、ひる

むことなく、威厳があり、誇り高く自然と調和して、ある意味、人間を哀れんでいるようにさえ見える。こちらが、見透かされてしまふような生き物であった。ゆっくりと四回押し、その瞳には、何か、遠い昔の記憶につながる何か、引つかかるような気がした。やさしい、その安心したような瞳の正体は一体何だ。その時、ふと、思い当たるものがあつた。もしや、さとしを産み落として直後に亡くなった妻の幸恵の生まれ変わりではないのか。輪廻転生。その彼女が、鹿の形を借りて、私やさとしと結婚した由美ちゃんの様子を確か認しに来たのではなからうか。そんな気がしてならなかった。もちろん、そんなことは、誰にも言える話では無いのだが：

私とその牡鹿との交流は、五分ほど続き、「もういいよ、自然にお帰り」と私が心で唱えると、彼は、静かに、ゆっくりと、林の中に戻って行った。少し、寂しそうな雰囲気、漂わせながら。

「すごい、大きな鹿だったね。落ち着いてるし、写真もぼつちり撮れたんじゃないの」

「もちろん、写真は、撮れたけど、それ以上に心の交流があつたよ。うな気がする」

「すぐく落ち着いた鹿だったですね」

「野生とは思えない威厳がありましたね」

「最初は、どうなるものかと、少しハラハラしちゃった」

「みんな、で、デジカメの写真を回し見しながら、感想を言い合つていた。」

「さあ、だいぶ時間が過ぎちゃったから、少し急いで、次の目的地に向かわないとね」と私は言った。

カタツムリ号は、ばさら峠を越えて下田方面に下って行った。私は、遅れを取り戻すために、稲取までのルートを再検討してみることにした。ここは、ひとつ、稲梓から河津の縄地に抜ける山道を通つて、みんなを驚かせようかとひそかに企んでみた。

「今から、時間を稼ぐために、昭和レトロな集落を越えて、河津まで一気にワープするからね！」

みんなは、半信半疑、こんな山道を登って、ほんとに大丈夫？と口数も少なくなつていったが、二十分も経たぬうちに河津まで抜けてしまふと、

「すごい！ よく、こんな道知ってますねえ」と、私はたちまちのうちに、尊敬のまなざしでみんなから注目された。